

## 美術の窓(122)

## 蕭白を読む

大和文華館館長 浅野秀剛

浮世絵を読むことを専らとしてきた私が、「蕭白を読む」ことになったきっかけは、6月23日に、三重県立美術館で開催されていた『蕭白ショック!! 曾我蕭白と京の画家たち』展を観覧し、佐藤康宏氏の講演「蕭白は笑う」を拝聴したことにある。蕭白は、作品を制作するとき、必ずといってよいほど何らかの捻りを加えるということを改めて認識し、そういった眼で作品を見ると、いくつかの想念(妄想の類かもしれない)が湧いた。そのうちの二、三を書かせていただきたいと思う。

一つは、三重県立美術館蔵で、展覧会にも出品されていた「竹林七賢図」(図1)襖絵である。この作品は、雪景であること、七賢のうちの五人が屋内に、二人が屋外にしていることなど、通例の竹林七賢図と比較して極めて特異な図様であるが、その点について、佐藤氏は「絵画と現実一若冲・蕭白・蘆雪の場合」(『日本美術全集19 大雅と応挙』講談社、1993年)のなかで、二人が竹林を去るという逸話を踏まえて作画したのではないかと述べている。その当否は、今後検証されなければならないが、蕭白が、通例

全く意味のない図像をここに入れた理由が少し分かってくる。もっと想像(妄想)を逞しくすれば、「竹林七賢図」全体が「鉢の木」「女鉢の木」を下敷きにして構成されているのではないかと思う。左端の、手に息を吹きかけている高士は雪中を歩いてきた北条時頼に重ねあわされており、屋内で談笑する五人は、鉢植の梅松桜で暖まった時頼や佐野そして佐野の妻たちと考えるのである。そうなると、雪の景であることは必然となる。

佐藤氏の影響を受けて更に深読みすれば、蕭白は、竹林七賢と鉢の木という、中国と日本の理想的処世やあつぱれな行為を俗に落し、悪戯を仕掛けたと解釈することも可能であるかもしれない。そうであれば、ボストン美術館蔵の「龐居士・靈昭女図屏風(見立久米仙人)」と同趣向の作品となるのであるが、果たして?

いま一つは、ボストン美術館蔵の「朝比奈首引図屏風」(図3)である。これは今、日本で巡回している「ボストン美術館 日本美術の至宝」に出品されている。図録の解説を読むと、鬼と首引しているのは、朝比奈ではなく、坂田金時、また源為朝である可能性もあるという。朝比奈と鬼の首引図は、正徳6年(1716)刊『花洛絵馬評判』に写された寛文3年(1663)奉納の山田金兵衛筆の絵馬や、その絵馬を基にした元禄15年

(1702)頃刊の大森善清の絵本などがあり、比較的知られた図像である。この武者を坂田金時とする説は、背後に控える渡辺星紋の袴をはいた武士を渡辺綱とすると、首引武者は、綱と同じ源頼光の四天王の一人である坂田金時に比定できるのではないかという発想から生じたものと思われるが、鳥居清朝画の享保期の細判紅絵に金時と鬼の首引を描いた絵馬がある(ホノルル美術館蔵)ことを示しておきたい。源為朝説は、狂言「首引」の武者が為朝であることによる。武者の文様に渡辺星を使うということは、当時の感覚で言えば、この武士は渡辺綱ですよと明言しているようなものなので、背後の武士を綱とすることは妥当であろう。また、幔幕にしっかりと描かれている笹竜胆が源氏を表わすことも明白である。となれば、図様の基本設定は、鬼に関係した武士たちを集めた蕭白の悪戯と考えることもできるのではなからうか。朝比奈、金時、綱、頼光、為朝そして、幔幕を紅葉狩の舞台設定と捉えれば、平維茂のイメージも加わる。そして、綱の背後の老人であるが、この人物を長寿だった三浦大介義明と考えるのである。因みに、朝比奈は義明の曾孫に当たる。蕭白は、自身を義明の子孫と言っているのも、この老人は、義明の姿を借りた蕭白自身といえることができるかもしれないが、果たして?

図1



図2



図3



季刊 美のたより No.180

平成24年 10月7日

発行 大和文華館